

旅券返納命令

JJ1SXA/池

2月4日、自民党の高村副総裁は、記者団に対して「後藤さんが3度にわたる日本政府の警告にもかかわらずテロリスト支配地域に入ったことは、どんなに使命感があったとしても、蛮勇というべきものであった」と話した。

高村氏は「亡くなった方をむち打つために言っているわけではなく、後藤さんの後に続く人たちが細心の注意を払って、蛮勇にならない行動をしていたきたいと願うからだ」と発言の趣旨を説明。

その上で、後藤さんは「自己責任だ」と述べておられるが、個人で責任をとり得ないこともあり得ることは肝に銘じていただきたいと指摘した、この高村発言に、批判の声もあるが、私は、至極尤もな発言と思う。

外務省は7日、シリア渡航を計画していた男性に対し旅券法に基づいて返納を命じ、男性から旅券を受領したと発表した。

返納を命じた理由について、同省は「隣接国を経由してシリアに渡航する旨を表明しており、警察庁とともに渡航の自粛を強く説得したが、意思を変えなかった」などと説明している。

菅官房長官は、記者会見で、シリアへの渡航を計画していた日本人男性の渡航を差し止めたことについて、憲法が保障する報道・取材の自由などは最大限尊重されるものの、政府としては、邦人の安全確保が極めて重要な責務だとして、適切な対応だったという認識を示した。

旅券返納を命じられたのは、杉本祐一フリーカメラマンだ、「渡航の自由」か「邦人保護」かと旅券返納命令について騒がしいが、「イスラム国」に殺害されたフリージャーナリストの後藤健二さんがシリアに渡航する前、外務省は9、10両月、電話と面談で計3回にわたり渡航中止を要請したが、受け入れられなかった経緯がある。

このため、同省内では「あれだけ止めてだめなら、ほかの強い手立てが必要になる」（同省幹部）との声が出ていた。

今回の旅券返納は、旅券法19条の規定「旅券の名義人の生命、身体又は財産の保護のために渡航を中止させる必要があると認められる場合」に基づくものだ、杉本祐一なる人物は、本人のブログ記事を読むと、箸にも棒にもかからない人物に思える。

ネットでは、お笑いタレントのガリガリガリクソンさんが「台風の時に増水した川の様子見に行くなって親に習わなかったんかいな。自由と勝手は違うって先生に習わなかったんかいな」とツイートで皮肉っている。

そもそも事前にシリア行きを明かしていたことへの疑問の声もある。

堀江貴文氏が、「この人スタンドプレーでしょ、黙って行けばパスポート返納命令は出ない」と自らのサイトでコメントしている。

ジャーナリストの安田純平氏は、外務省の対応を批判する一方で、自分の体験に基づいてこうつぶやいた…「これは人によるけど、俺は出発前も滞在中もどこへ行くか、どこにいるかは帰国するか安全な場所まで出るまで公開しない。ネットで流れたら変な連中に知られて邪魔されたり危険なことになったりしかねないから。信頼できる人限定で取材過程を知らせるのは逆に安全対策になるけど、クローズドでやらんと」 と。

後、こんなコメントも…そんなに報道に命を捧げる覚悟と、行かなきゃいけないと言う信念があるなら日本国籍を捨てて、シリアに国籍移せばいいだろ、そうしたら誰も止めないし、そもそも止められない。…売名目的の渡航なんかするんじゃないよ。…帰って来られれば、稼いだ金は自分のもの、とつつかまれば、国の費用、国民の税金だ…、等々。

杉本は「九条の会会員」で、あちこちで吹きまくっている、と思えば、ブログで彼女を募集している、何かしっちゃかめっちゃか、だが、左翼人種であることは間違いない。

こんな人物にシリア行きを認めれば、直ぐに拘束され、イスラム国に利用されて、国が迷惑を受ける、政府は人命を表に出して、返納命令を出したが、こんな人物の人命を尊重する必要は無いような気がする、迷惑を蒙ることはごめんだ、返納命令は正しい処置だと思う。

返納命令を批判する人達は、ケースバイケースであることを考慮せよ、ジャーナリストを名乗っていても、本当にその名に値しないジャーナリストも多いような気がする、何が何でも伝えなければと使命感に燃えている人もあれば、何とか名前を売って生活の糧にしようと思っているだけの人、名前を知られることで名誉欲を満たし満足する人等々千差万別だ、何が何でも、政権に反対を唱え、批判する人達も、内容を吟味してからにしてもらいたい。

権力に反対、批判も時と場合では必要なことだが、何でも反対は、一寸いただけない、反対する理由が正論でなければならない。

杉本は、後藤氏とは、人格が、月とすっぽんほど違う、そんな人格の人物の報道写真は、国民は欲しない、それにしても、後藤氏は惜しい人物だったと思うが、イスラム国の残虐なナイフで散ってしまった、矢張り、「死んでしまえばおしめ一よ」だ、命を捨てるのは早かった、何が何でも伝えなければと使命感に燃えている人も、多角的に世界を見渡して判断を誤らないようにしてもらいたい。